



このレポートは、私・和仁が毎月のコンサルティング活動や日常生活を通して気づき、学ばせて頂いたことを書き留めたものです。  
お気軽にご笑読頂ければ幸いです。

## 【今月の気づき】



### 『初対面の面談で、すぐにラポールを築く方法。』

クライアント先で、数人の社員さんと個別面談をしていたときのこと。その目的は、社員の悩みや会社への要望を引き出して、改善策を立体的に浮き彫りにすることでした。ひと通り面談が終了し、議事録をまとめていたときのこと。となりで書記をしていたスタッフがわたしに話しかけてきました。「和仁さんって、初対面の社員から上手に本音を引き出しますよね～。ふつうなら、相手も緊張感や警戒心で、無難な会話で終わりそうな気がするんですが。でも今日、その秘訣がわかりましたよ」

わたしは通常、営業も面談も、事前にゴールは決めておくものの、その最中はほとんど成り行きというか流れに乗って無意識でやっているため、どこに工夫しているのか自覚がありませんでした。そこで、その秘訣とは何かを尋ねてみると、彼の意見はこうでした。

「**相手が発言した内容の正当性を、とても論理的に裏付けてあげている**んですよね」そう言われて、わたしは自分が営業でもコンサルでも、初期段階にはそれを無意識にやっていることに気づきました。その日、ある経理担当者が「数値データを経営に生かせるよう加工しろ、と社長に指示されているのですが、どうまとめていいかわからないんです」と自信なげに言われた際のこと。わたしは次のように答えました。

「そうですか。でも、**Aさんの気持ち、わかりますよ。**一般的に、『経理担当者は数字を扱っているから、会社の数字をちゃんとわかっているはずだ』と思いこんでいる人が多いんですよね。でもね、実は全然関係ないんですよ。**なぜなら、**経理の人は社長と違って経営をしている訳じゃないので、経営においてどんな数字が必要なのか、知りようがないからです。わたしも、サラリーマンのころは同じでした。だから、そこは開き直って、社長に『どんなアウトプットが欲しいですか？』と直接訊いてみてはどうですか？」

その瞬間から、「ああ、恥ずかしいことじゃなかったんだ」という安心感からか彼の表情は一変し、滑らかに話し始めたのです。**本人すらうまく説明できないことを、先取りして論拠づけてあげる**こと。その主張が正しいかどうかは別として、論拠づけられるということは、一理ある証拠。相手が正しいかどうかを裁く前に、そのまま受け入れて論拠づけられるかどうか考えてみると、理解しがたい人の思考パターンに気づけるかも知れませんよ。

## 【今の一冊から】

### 『常識に騙されず、真実を見抜く。』

＞難関中学に合格させた家庭取材して驚いたことがある。一応、子ども部屋はあるのだが、  
＞勉強は食卓でやらせていた家庭が多いということだ。「子どもが小学校の低学年時代は、  
＞どのようにして勉強したらいいかわからないものです。立派な学習機を購入し、小学校入  
＞学とともに子ども部屋を作って安心していると、子どもはどうしていいかわからず、つま  
＞ずいてしまうものです。」中学受験で実績を上げている首都圏の進学塾関係者や有名私立  
＞小学校の関係者も異口同音にこう語っている。わが身を振り返っても、勉強はわかるよう  
＞になると面白く、わからなくなると途端につまらなくなるものだ。

（『頭のいい子が育つパパの習慣』清水克彦 著 PHP文庫 P.55 より引用）

上の話を読んで、来年小学校に入学する娘には、わたしたち親と「つながってる感」のある環境を保つ工夫をしようと決意しました。子供が大きくなると当たり前のように「自分の部屋」を与え、「学習机」を与え、そこにこもりきりにさせる。それが本当に両親が、そして本人が望む結果につながるのか？考えさせられるお話です。

この話にもあるように、わたしたちはどこかで世間の「常識」を当たり前と思い込み、望まない結果を招いていることがあるように思います。

わたしの例を1つご紹介します。数年前まで、わたしはパソコンに届くメールをすべて携帯電話に転送させていました。「メールはどこでも見れたほうがいい」「隙間時間を有効に使える」「そうすれば、帰ってからの仕事が減り、ゆとりが生まれるし、届いたメールの内容が気がかりだ、というストレスから解放される」そう信じていました。

しかし現実には、そうはなりません。移動中、あるいはレストランで食事中、平日も休日も構わずメールが手元に届きます。さらっと読み飛ばせるメールもあれば、「けっこうハッピーなお願いごと」や「グサッとくるようなダメ出し」、下手をすると返事に相当なエネルギーがかかりそうな複雑系のメールまで……。それを見る度に、心がざわめきます。その結果、オンタイムもオフタイムもなく、否応なく心は緊張し続けていたのです。

そこである日、思い切って「**1ヶ月だけ**携帯の転送をやめてみよう」と決めました。どうしても不便なら、来月から再び転送させればいいのだから。すると不思議なことに、まったく困らないのです。それどころか、「パソコンに向かうとき以外はメールは見れない」という既成事実ができたおかげで、自分にどんなメールが届いているか、全く気にならなくなりました。つまり、パソコンに向かってメールを受信するまでは、マイペースで時間を過ごせるのです。「いつでも、どこでもコミュニケーションできることが便利」というわたしの中での常識に騙されかけていた。その常識は、わたしにとっては真実ではありませんでした。